

■ 寄稿

広報ワーキンググループの活動



■ ITC副所長 横田 絵理

ITCのワーキンググループのひとつとして「広報ワーキンググループ（WG）」が生まれたのは昨年2008年の春のことです。

慶應義塾の情報基盤を守る「縁の下の力持ち」としての機能を担うITCですが、基盤ゆえになかなか皆さまにその活動内容やネットワークの状況について知っていただく機会がありませんでした。ITCの活動はさながら「ブラックボックス」で、よくわからないけれども、専門家たちがいて、何か困れば手助けしてくれるという確信が持てる駆け込み寺のような存在であるともいえます。

しかし、慶應義塾の情報技術については、先人が常に時代の先端を目指して築きあげてきたものでありますし、近年は外部の方々に活動についてお伝えするべき機会も多くなっています。たとえば、一昨年作成されましたITCのリーフレットは、慶應のITC活動に関心を持ってくださる方々への重宝な資料となりました。またkeio.jpや教育支援システムなどを通じ、これまで以上に慶應に関係する皆様すべてとITCの活動の関わりが強くなっているのは間違いなく、そこで「ITCからの情報発信を考える」という狙いで仰せつかったのが、広報ワーキンググループでした。

とはいえ、広報WGの検討すべき内容は比較的抽象度が高く、差し迫った目標が明確にあったわけでもありません。何がITCの広報の課題か、いつまでに何をどのようになるのかなどを月1回1時間半の検討会でメンバーにより手探りで決めていきました。その過程で、ITCのホームページについての見直し、keio.jpの普及広報活動、教育支援システムの広報、そしてITC自体の広報など多岐にわたる課題がでてきます。

そして検討活動の中で生まれた案のひとつが、この年報作成です。ITCの活動は引き継ぐべきこともたくさんあり、また知っていただきたいデータもたくさんあります。これを年報として広報としてまた記録として作成したいと考えました。しかしいざ作成となりますと、広報WG自体では難しいので、年報作成のためのWG（子WG）をつくり、各キャンパスから年報WGメンバーをお願いしました。初めてのことでデータ集めなど大変な作業だったとおもいますが、みなさまの熱意の下、ここに年報が完成したことはとてもありがたいことです。

おりしも2008年は慶應150周年記念の年でした。2008年11月には記念式典が開かれ、ITCはその模様を各キャンパスにネット配信しました。多数の場所に同時に間違いなくリアル情報を配信するというのは前例がない難しい作業で、成功するのかという不安のな

か、しかしながら間違いは許されず、現場の方々の当日までの緊張感は大変なものがあったと聞いています。結果的にはなにごともなく配信は成功裏になされました。こうした活動はまさにITCが日ごろ求められている仕事の特徴を端的に示す例です。このときの活動についてもこの年報に詳しく報告されています。

皆様におかれましては、ぜひこの機会に日ごろは見えにくいITCの活動について、ご関心を持っていただければ幸いです。またご拝読いただいた上でご意見など頂戴できれば幸いです。

利用者と協生する情報インフラ



■ ITC副所長 中村 修

情報インフラは、今やキャンパスにとって道路や水道、そしてトイレと同じように無くてはならないインフラとなり、あつて当たり前、使えなければ罵倒されるという時代になった。また、電話や水道の様に10年間その使い方が変わらないインフラとは異なり、数年前までは情報コンセントとメールさえ提供していれば良かったが、今では、無線LANでのアクセス環境は勿論のこと、プロジェクト毎の仮想ネットワークの提供やWebサービスの提供、そしてセキュリティに関するサービスといったように日々サービスしなければいけない項目が拡大していく。このように利用者にとって無くてはならないインフラでありながら、サービス項目は日々刻々と変化し、また、利用方法も利用者毎に千差万別といった状況の中で、ITCが向かっていく方向性をしっかりと考え、今我々が何をすべきかを常に考えていくことは非常に重要である。

慶應義塾は150周年記念事業として、多くの建物を一新することで、少なくとも今後10年間はキャンパスを魅力的なものとして維持することができると思うが、情報インフラは、日々進化し続けなければ、誰も見向きもしないゴミためになってしまう。常に自分たちが今何をしなければいけないか、どんなインフラを提供することが利用者にとって、また慶應義塾にとって魅力的なものになるのかを考えながら日々の業務を遂行していかなければいけない。

ITCは全塾の組織であり、一貫教育校を含む慶應義塾全体の情報インフラを預かっている組織である。ITC本部が下支えしながら、各キャンパスITCがそれぞれのキャンパスおよび諸学校の情報インフラの業務にあたっている。これは私見であるが、業務にあたっている職員は、非常に専門性の高い人材が集まった、慶應義塾の中でも特殊な組織であると思う。勿論十分な数の人員を擁しているとはいえ、外部からネットワークやシステムの運用のための人員をかなりの数、導入することにより何とか運用をおこなっている。優秀な人材が日々の業務に忙殺されているといっても過言ではない。このような状況のなかで、前述したようにITCが向かうべき方向性を日々考え、常に魅力的な情報インフラを提供できているかといえば、胸を張ってできていますとはいえない状況にある。ITCの副所長という立場になり、多くの教員や学生から、キャンパスの情報インフラに対する不満不平を聞くたびに、日々の業務に忙殺され、苦虫を噛み潰しているITC職員の顔が脳裏を横切る。

このような状況を抜け出すためにはどうすれば良いのであろうか？ 人員を増やす、また外部にサービスを委託するなどの方法が一般的な解決方法として考えられる。しかし、人員を増やす為には、お金が必要である。勿論サービスを外部に委託する場合も同様である。その費用は、大学が支出するのか？それとも利用者負担なのか？ このようなことだけを日々考えていると、暗く暗澹とした未来しか見えてこない。

10年以上前の事であるが、新しいキャンパスとして湘南藤沢キャンパス（SFC）がスタートしたとき、キャンパスに風変わりなオブジェが置かれていたことを思い出す。ガードレールがタイヤの上におかれたオブジェである。それはどうもベンチであるらしい。手作りで、あまり格好が良いオブジェでは無かったので、人によっては変なものをキャンパスに置いて欲しくないと思った人もいたかもしれない。しかし、すくなくとも座る場所としては利用できた。また、数年前、通路となっている石畳と教室との間が、麦畑（もしかしたら、乾田の田んぼだったのかもしれない）が出現したのである。キャンパスのちょっとした空間、今までは雑草が生えていた空間に、緑が綺麗な麦畑が現れたのである。こんなところに、畑を作ったら通行の邪魔になると腹立たしく思った人もいたかもしれない。しかし、数メートル回り道をすれば、別に通行ができなくなるというものでもなかった。ぼくにとっては、キャンパスのこんなところに畑？というアンバランスさが、何ともユーモラスで心を和ませてくれた。

SFCは、どうも慶應の中でも自由な気風らしく、いろいろな人がキャンパスを舞台に活動している。数年前から生協で買い物をしても袋に買ったものを入れてくれない。これは、環境に配慮した今では当たり前のことであるが、最初に買い物袋がなくなった時には驚いた。また、夕方近くになると、学生の携帯に、売れ残りのおにぎりを今から値段下げて販売するよといった情報が届くらしい。これらのサービスは、学生が主体的に関わり実施しているプロジェクトである。もちろん、IT分野でも、色々な事がおこる。教室に、遠隔授業ができる設備が入ったり、素晴らしいプロジェクトが設置されることが良くあるが、SFCの場合これらの設備のいくつかは、大学の予算ではなく研究プロジェクトによって獲得した研究予算で設置されているものがある。勿論教室に設置されているので、僕なども普通の授業で利用させてもらっている。また、今年には、キャンパスをサービスエリアにしたWiMAXの無線設備も完成した。これらは、研究プロジェクトが基本となり、新しいサービスを展開している。もちろん、研究の為の設備であるが、キャンパスで生活している利用者が結構自由にこれらの環境を利用することができる。

慶應義塾は、某国立大学とは異なり私学なのである。管理したりされたりするのを嫌い、独立自尊の精神を尊ぶ。キャンパスというインフラもみんなでもっとも過ごしやすい空間にしているために、それぞれができることを調和（ラフ・コンセンサス）をもって進めていくことができる素養をもっている。何となく無造作に置かれたガードレールのベンチ、突然現れた畑、生協の無くなったショッピングバックもそれぞれの目的や狙いがあり、また周りの

人たちのことを思いやる気持ちを持ちながら具現化されたものである。またSFCで展開されている多くの新しいサービスのよう、研究主体で構築されているものでも、キャンパスのインフラとして共用できる体制を作っていくことができるのである。

ITCは、サービスを提供し管理するという考え方ではなく、学生や教員が自由に発想し、それを具現化することができるインフラの提供を基本にするべきだと思う。サービスの多様化、人手不足などの問題を解決するための手法は、ITCがすべての問題を抱え込むのではなく、ITCが提供するインフラの利用者である学生や教員が自由に発想し、ITCが抱える問題を少しでも手助けしてもらえるような環境を作っていくことが得策なのである。管理する側される側ではなく、利用者が自ら手をさしのべてもらえるような自由で心温かい環境作り、キャンパスの小道に学生がそっと花を植えていってもらえるような雰囲気づくりが、明るく楽しいITCの未来に繋がると確信している。

ITCについて



■ITC副所長 萩野 達也

ほとんどの人はITCを「アイティーシー」と呼んでいますが、ITCは略称で正式な名称は「インフォメーションテクノロジーセンター」です。カタカナで書くと長いので名刺などで所属やタイトルとして書こうとする時には困り物です。みなさんも省略して「アイティーシー」と呼ぶのですから、正式名称をいっそITCにしてしまっても良いのかも知れません。他の大学を調べてみましたが、早稲田大学も東京大学も英語名は「Information Technology Center」で慶應義塾と同じですが、日本語名は、早稲田は「ITセンター」で東大は「情報基盤センター」となっています。やはりカタカナ名は長すぎるのかも知れません。

インフォメーションテクノロジーを直訳すると情報技術なのですが、東大は情報基盤としています。情報技術より情報基盤の方がITCの役割としては合っているように思います。ITCの元々は大型計算機の運用を行なうコンピュータセンターから出発したのだと思いますが、その時には、科学技術計算や各種のデータ処理だけを担当しておけば良かったのですが、今や、教育研究だけでなく事務処理を含めてほとんど全てのものがネットワークを利用した情報環境下で行なわれるようになり、ITCの管轄する部分は日々拡大していています。ITCの管轄はPCやネットワークだけではありません。たとえば、内線電話も現在はPHSを利用したものが中心ですが、将来的にはIP電話に替わっていきます。一部すでに置き替わったところもあります。IP電話になるとネットワークに接続する一つの機器となりますので、現在の管財の管轄からITCの管轄に移される可能性もあります。すでにコピー機はファックスとプリンタの複合機に置き替わりネットワークに接続されるようになりITCが管理に関わるようになっていきます。入退出の管理や監視カメラなどもIPベースのものの方が取り扱い易いために、今後導入が増え、ITCの関与も増えるものと思います。全ての機器がネットワークに接続できるようになりつつあり、その意味では導入される全ての機器に対してITCが関与しなくてはならなくなりつつあります。

ITCはこのようなネットワークとそれに接続される機器の導入・維持・管理だけでなく、その上で動く情報システムの提供も行なっています。これまでは、サーバやデータベースの機器提供だけに留まっていたましたが、最近ではいろいろな部署と連携し、新しい便利なシステムを開発して提供し始めています。たとえば、教育支援システムでは、授業の教材

を教員が載せて公開できたり、履修者からのレポートを集めたりすることができるようになってきました。従来までだと言語教育や情報処理教育などの教育グループで実験的にLMS（Learning Management System：学習管理システム）を導入していたものを、この教育支援システムでは全塾のすべての授業に対して提供できるようになりました。この他にも議事録管理システムや会議室予約システムなど、情報機器基盤だけではなく情報システム基盤についてもITCが提供するようになってきています。

さて、情報基盤の一つである情報データ基盤についてはまだ多くのものが各部署で個別に管理されています。学生の情報に関しては学事が持っていたり、教員の情報については人事や研究支援センターが持っていたりします。複数のところで重複して管理されていたりする場合もあり、更新したりした場合の整合性に問題が生じたりしています。私の研究個室の内線番号も、4年前に部屋を移動したにも関わらず、この間まで間違っただまシステムに載っていました。私自身が気付いたので修正してもらいましたが、気付かないところでどれだけ間違いがあるのか不安になります。ITCが提供している共通認証システム(keio.jp)では、このような個人の情報を集めて一元管理しようと当初考えましたが、うまくまとめることができず、認証部分を共通にするに留まっています。keio.jpでは認証はできますが、認証された個人に対する情報については学生か教員かの区別などのほんの少ししか分からない状態になっています。そのため、keio.jpだけでは複雑なシステムは作ることができず、結局従来のシステムとやりとりしなくてはならなくなっています。

また、情報データとしては、メディアセンターとの住み分けもあります。紙の情報の場合にはメディアセンターが管轄であることはすぐに決まるのですが、電子ジャーナルやマルチメディアなどのデジタル情報も増えつつあり、データの管理をどちらがすべきなのかの境界線が曖昧になりつつあります。教育支援システムの教材や授業をデジタルビデオで録画したものなどは、どちらが取り扱えば良いのか微妙です。現在の生きている情報で更新が頻繁に行なわれるものはITCで管理し、アーカイブして保存していく情報はメディアセンターで管理すれば良いと言う人もいますが、区別は微妙です。まとめて管理を考えると良いのではないかと思います。

このように、ITCは慶應義塾の情報基盤を支えるために職員のみなさんが日夜たいへんな仕事をしてきています。その意味では、ITCは「いつも・たいへんな・センター」あるいは「いちばん・たいへんな・センター」なのかもしれません。ITCの重要性をみんなに分かってもらって「いちばん・たいせつな・センター」であるともっと認識してもらい、職員の皆さんには「いつも・たのしい・センター」となって欲しいと思っています。